

日本とアジア、アジアにおける沖縄



(11月と12月のごあいさつ)

平成24年12月12日(水)

沖縄は、冬ほんとうに寒く感じます。そんなことを言って、本土の友だちに笑われています。でも太陽が出ると春です。沖縄は暖かいところです。

先日、沖縄金融公庫の譜久山理事長のご紹介により、沖縄事業再生研究会の第58回勉強会で、鈴木五十三先生(アジア・太平洋弁護士協議会次期会長)のご講演を聴くことができました。テーマは「**沖縄の発展とアジアの成長の連携を求めて**」ということで、先生のアジア諸国の弁護士等との交流やアジアへ展開する日本企業へのアドバイスなどのご経験を基に、法律家の視点から、**アジアにおける沖縄の事業**についての**可能性や工夫すべき事柄**について語っていただいた。

沖縄事業再生研究会の**会員との質疑応答**と意見交換は、日本とアジアの、或いはアジアとアジアの交流点とも言うべき**沖縄の現状と将来性**についての**ポイント**であった。約1時間、先生のお話を聴いた後、次のような点について約40分間、熱気のある、身近で、印象的な質疑応答と意見交換を行うことができた。

- (1) 海外における**事業の再生と発展のヨコ糸(発展)とタテ糸(法制、慣習)**
- (2) 企業の発展段階、**輸出 — 現地販売 — 現地法人、大企業と中小企業**
- (3) **企業誘致か、海外進出か、内向きと外向き、それぞれの事業特性**
- (4) **物流の役割と特産品の開発、ANAの国際物流拠点、在庫修理拠点**
- (5) **沖縄ブランドと商品力...具体的な泡盛、アグー、食材、EM...**
- (6) **発展するアジア、地理的位置の重要性とその生かし方**
- (7) **本土では見られない暖かい気候、スポーツ、医療...等々**

それには、社会的基盤としての**地域主権**の考え方と実行が必要であると思われる。復帰後の40年間を振り返ってみて、**沖縄の可能性を実現するための条件**が欠けていたのではないかと。主要な点は、**第一に沖縄自身の自覚の問題**、自主自立の精神の欠如である。補助金などの特例を得て産業や企業を育成できるという幻想、依存心である。**第二に、国や県の構想の問題**、リーディング産業を育てる制度の欠如である。復帰前の社会の継続性を配慮した**一国二制度的な発想**が必要であったのではないかと。後から言うのは酷ではあるが、失敗の40年と言う人もいる。香港に見られるような、従前の経済制度等に乗ったスムーズな移行と比較した時、復帰後の40年間は正しい**沖縄振興の実行**であったとは言い難い。

淡路、阪神大震災の時は、翌日株価が上昇したのに、**東北大震災**の時はそうでなかったのは、乱暴な言い方ではあるが、**古いものの廃棄と新しいものへの期待感**ではなかったのかと思う。**高齢化と人口減少**により**閉塞感**が漂い、将来に不安をかかえている日本、1960年代に発展させた**革新的な経済システム**も今日危機に瀕している。その多くを**放棄し、再設計する時期**に来ている。アジア地域という未知で、新しい場への**挑戦**が、日本の社会や経済の活性化につながれば...と思いながら、興味が尽きないお話に聴き入った。